

氏 名	たか た とし お 高 田 時 雄
学 位 の 種 類	博 士 (文 学)
学 位 記 番 号	論 文 博 第 499 号
学位授与の日付	平 成 18 年 1 月 23 日
学位授与の要件	学 位 規 則 第 4 条 第 2 項 該 当
学 位 論 文 題 目	敦煌資料による中国語史の研究 ——九・十世紀の河西方言

論文調査委員	(主 査) 教 授 庄 垣 内 正 弘	教 授 木 田 章 義	教 授 平 田 昌 司
--------	------------------------	-------------	-------------

論 文 内 容 の 要 旨

【第一章：序説】

安史の亂(755-763)を境として、中國西北部は軍事的に空白となり、いわゆる河西回廊に點在するオアシス都市はしだいに新興吐蕃の勢力下に入った。もっとも遅くまで頑強な抵抗を行ったとされる敦煌も結局は786年に陥落した。この時點から敦煌の吐蕃支配期が始まるが、それは848年に敦煌の土豪張議潮が舉兵し、歸義軍政權を樹立するまで60年以上に亙り繼續した。漢の武帝以來、西域への前進基地としての役割を果たしつつも、漢族の植民都市という性格を色濃く留めたこの都市が吐蕃の支配下に入ったことは、政治史のみならず文化史的にも、とりわけ言語史の上で大きな變化をもたらすことになったのは自明である。また張氏から曹氏に引き繼がれた10世紀の歸義軍時期は、敦煌が中原の王朝から相對的な獨立を保持し、一個の獨立小王國を形成したため、單純に吐蕃期以前の狀態に復歸することなく、歴史的經緯を踏まえた新たな言語情勢が生み出された。由來、この地では廣い意味での漢語西北方言を基礎とした言語が日常的に使用されていたが、唐代には首都長安の言語規範が強い強制力を伴って持ち込まれ、行政、教育、宗教などあらゆる局面でこの規範が遵守された。吐蕃期を経ることによってその規範意識は希薄化し、さらに實質的な獨立國家であった歸義軍政權下では、土着の語音が長安の語音に取って代わり、標準としての地位を獲得するに至った。この言語をわれわれは(古代)河西方言と呼びたいと思う。

20世紀初頭敦煌藏經洞より發見されたいわゆる敦煌遺書の中には、河西方言の要素を反映する現象がまみ見られ、その點に關しては早い時期からペリオやマスペロによる指摘がなされていた。また羽田亮やF. W. トマスをはじめとする學者たちが藏漢對音資料を精力的に紹介したことによって、その後も研究資料は着實な擴大を見た。20世紀の30年代に入ると、それらに公刊された資料を用いて中國の羅常培が本格的な音韻史的研究を行った。彼は「千字文」「金剛經」「阿彌陀經」「大乘中宗見解」という4種の藏漢對音資料に加え、音注本「開蒙要訓」(P2578)の詳細な分析を基礎とし、唐五代の“西北方言”を再構するとともに、現代の西北方言6種との比較を試みた。この研究は當時として非常にすぐれた業績であり、その後もかなり長いあいだ絶大な影響力を保持したが、實は重要な不備が一つ存在する。それは同氏の用いた藏漢對音資料の中心が、後に觸れる第一種資料であり、第二種資料すなわち新しい層を反映する資料が少なかったために、9・10世紀敦煌における言語的動態を十分に把握し得なかった點である。河西方言の實態は、實は第二種資料にこそ十全な形で表現されているのである。羅常培以降の關連研究としては、トマスによるコータン・ブラーフミー文字轉寫「金剛經」の公刊があり、この資料に漢語史的な検討を加えた水谷眞成、チョンゴル等の研究がある(また最近ではエメリックとブーリーブランクが新しい研究を發表した)。チョンゴルはまた、60年代に羅常培の用いた資料を切韻の體系から再度整理し、再検討を行って、個々の點で羅氏の研究の補訂を行ったが、それに取って代わるには至らなかった。

資料の面でそれまでの不足を補い、研究の全く新たな展開に道をつけた重要な論文が、1957年ウォルター・サイモンによって發表されている。サイモンは主としてフランス國立圖書館のチベット語寫本の中からそれまで知られていなかった幾つかの藏漢對音資料を紹介し、多くのテキストについてその漢文原典の同定を試みた。筆者の研究は、少なくとも資料の面において、この論文に導かれるところが大きい。

【第二章：資料】

本論文において使用した資料としてはまず藏漢對音資料がある。これには形式上、漢文テキストにチベット文字による音注を施したもの（音注本）と、チベット文字によって漢文を書寫したテキスト（音寫本）の二類を含むが、對音のみを考える場合にはほぼ同じ価値を有するものと考えることが出来る。またこれらは敦煌の漢人がチベット文字を用いて書いたものであり、古くから考えられていたようにチベット人の手になるものではない。この點はこの種のテキストの資料的価値を考える場合に重要である。以下にそれらを列挙する。

1. 千字文 C P. tib. 1046 音注本
2. 金剛經 K India Office C129 音寫本
3. 阿彌陀經 O India Office C130 音寫本
4. 大乘中宗見解 T India Office C93 音注本
5. 天地八陽神呪經 TD P. t. 1258 音寫本
6. 法華經普門品（觀音經） FP P. t. 1239 音寫本
7. 南天竺國菩提達磨禪師觀門 NT P. t. 1228 音寫本
8. 道安法師念佛讚 DA P. t. 1253 音寫本
9. 般若波羅密多心經 P P. t. 448 音寫本
10. 法華經普門品（觀音經） FPa P. t. 1262 音注本
11. 寒食篇 HS P. t. 1230 音寫本
12. 雜抄 ZC P. t. 1238 音寫本
13. 九九表 99 P. t. 1256 音寫本
14. 唐蕃會盟碑

若干性格の異なる14唐蕃會盟碑は除外して、以上の13種のうち2, 3, 5, 6は第一類を代表し, 7, 8, 9は第二類資料を代表する。11, 12は前者に近く, 10は後者に近い。1と4は独自の性格を有するため、その分類にやや躊躇を覚えるが、どちらかというとも後者に近い。唐蕃會盟碑の對音と比較すれば、第一類がより會盟碑に近く、第二類はより遠いということになる。これは資料の性格としては、第一類がより標準語的であり、第二類は標準語からより遠ざかろうとする傾向を示すもので、より河西方言的な特徴を露呈していると考えることが出来る。書寫年代から見ても、第一類には9世紀に屬することが分かるものがあるのに對して、第二類は明らかに9世紀であることを示す證據はなく、むしろ10世紀に降ると考えられる。

上掲の藏漢對音資料以外に、本研究ではコータン・ブラーフミー文字轉寫の金剛經(kb)を併せ用いるとともに、音注本「開蒙要訓」(P. ch. 2578), 諸雜難字(P. ch. 3109), 難字音注(S840), 佛書音注(P. ch. 2271), 難字音注(P. ch. 3270)などの音注資料はかを用いた。

【第三章：音韻】

第二章において、概観した諸資料に基づき、聲母・韻母・聲調に分かって詳細な検討を加えた結果、かなりの程度まで、河西方言の特徴が明らかになり、標準音との異同が明白となった。またこれによって序説で展望した9・10世紀敦煌における動態的な變化を確認することが出来た。

まず聲母に関しては、廣い範囲に觀察される有聲音聲母の無聲音化がその特徴の最たるものとして指摘できる。K, Oのような標準音資料では、摩擦音聲母の無聲音化は觀察されるものの、破裂音・破擦音になると無聲音化はまだ十分に進行していない。それに対して河西方言を反映する資料では、すべての全濁音聲母にわたって無聲音化が見られる。またもう一つの體系上での大きな變化は、舌音の知系聲母と正齒音三等の章系聲母が合流していたと考えられることであり、これによって口蓋音は破裂音と破擦音の區別を失った。その他、禪母字がほぼすべて摩擦音に歸している點や、疑母の脱落の徴候など、個別的に興味深い特徴が觀察される。

河西方言の韻母體系は、NT, DA, Pなどを中心とする藏漢對音資料、コータン文字轉寫資料Kbr, また「開蒙要訓」などの音注資料などから知られるが、それは藏漢對音資料のうちK, O, TD, HS, 唐蕃會盟碑などが反映する標準音乃至標準

音的な音系に比べて際だって異なる様相を呈する。

河西方言では、標準音ではなお保持されていた三等韻重紐二類の區別が消滅し、A類に合流したと見られる。(これは藏漢對音についていえば、チベット文字の ya-btags の有無によって區別されていたものであるが、第二類の資料では重紐二類の兩者ともに ya-btags が用いられることで、a類に合流したことを知り得る。) そのため拗介音は三・四等を通じて唯一種類の -i- のみになった。これは體系上の大きな變化である。

また河西方言に特殊な現象として、宕攝、梗攝の鼻音韻尾 -ng が脱落し、主母音が鼻母音となっていた點を指摘できる。しかし、同じ -ng に終わる韻母でも、他には通攝にそのわずかな兆しが見えるのを除いて、江攝、曾攝ではこの脱落は全く觀察されず、他の鼻音韻尾 -n, -m もまったく脱落を示す徴證は見えない。これは今日の西北方言が -n, -m を含めて脱落させているのと大きく異なる點である。

10世紀の河西に行われた方言の中に、止攝開口字の母音を、齒頭音聲母の下で、今日の北方語のごとく [i] から [ɿ] に變化させるものがあつたことが、Kbr から知られる。

聲調については新たな發見がなされたわけではない。しかし音注資料や別字異文などが、調類間の關係の度合いを測る上で多少とも有用であるほか、對音資料の變則的な扱いから、調値に關する何らかの情報を推測する可能性がなくはない。本研究では、ごく僅かにその一端に觸れた。

本章の最後には「河西方言の性格と現代西北方言」の一節を附し、10世紀河西方言と今日の西北方言のあいだに直接的な繼承關係を見いだすことは困難であることを述べた。特に10世紀河西方言と現代の敦煌方言のあいだには歴史的背景によって引き起こされた大きな斷絶があり、前者の中に後者の祖形を單純に見て取ることは不可能である。10世紀河西方言は、ある意味では失われた方言ということが出来る。

【第四章：語法】

河西方言の語法資料となるものは決して豊富ではない。敦煌遺書のなかにはいわゆる變文・講經文をはじめとする初期白話のテキストが含まれているが、これらを以て直ちに河西方言で書かれたものと認めるには大きな躊躇がある。しかし幸いなことに、敦煌資料中には10世紀の河西において日常の言語をそのままに寫したと考えられる希有な材料が少數ながら存在する。それはチベット文字やコータン文字で書寫された、これらの言語と漢語の對譚による會話文例集である。本研究には、チベット語との對譚のもの三種、コータン語との對譚になるもの三種を用いた(寫本番號等は本文に譲る)。そこから計128條の口語河西方言の短文サンプルを得ることが出来る。まず音寫されたテキストにつき、チベット語、コータン語の對譚を參考としつつ、それらを可能な限り還元し、それを資料として語法の概觀を行った。以下に特徴的な諸點を列挙する。

人稱代名詞には「阿」「他」「sho myi」のような本來の代名詞と、他の品詞から轉じた「阿郎」「官人」など敬稱の二人稱、自稱「某[阿]乙」が見られ、また「這」「那」などの指示代名詞がある。とりわけ興味深いのは一人稱複數の「sho myi」である。これは後世では「咱們」となる語であるが、「sho」は恐らく「洒家」の「洒」に關係し、「myi」は「弭」や「每」で表記される複數語尾であろうと考えられる。いずれにせよ、この形式は漢字文獻には見えず、漢語の人稱代名詞の發展を考える上で貴重な資料を提供する。

疑問詞には「阿誰」「什麼」「什麼物」「阿沒處」「阿那里」「多少」「早晚」「怎生」が見られる。接頭辭「阿」の使用がかなり廣範圍に見られるのが特徴的である。

接尾辭としては「里」「kha」があり、ともに場所を示す語である。「kha」は「na-kha」の形で現れ、恐らく「那下」「那會兒」の「下」「會」と關係を有する成分であると思われる。

句末の助詞には「啊」「呀」「哪」「也」「嗎」が見える以外に「ro」 a」という不思議な語が出現する。都合六見するので、決して例外的な用法ではないとわかるが、漢字に還元することは困難である。禁止文に用いられることが多いが、かならずしもそれに止まらない。また「啊」も実際には” a で書かれる場合と ra で書かれる場合が存在するが、その差異は必ずしも明らかではない。

肯定と否定を重ねることで疑問表現する、いわゆる反復疑問文の形式が多用される。肯定と否定のあいだには何らの成分を必要としないが、多くの場合 a ~ am のような中間の助詞を挟むのが特徴的である。またこの助詞の頭子音は先行音節の末尾音に同化することが多い。

禁止構文は「莫」を動詞に冠することで表現される。

口語であるせいでもあろうが、詞序はかなり自由であり「水擔來」「氈擔來」「鹽擔來」「酒擔來」など目的語を前置することがしばしば行われる。しかし「擔飯食來」のような例もまた存在するので、正則とは考えにくい。

論文審査の結果の要旨

今日までに伝えられた中国語の文献は夥しい数に上る。しかしこれらの文献のほとんどは漢字という表意文字によって記録されたため、過去の中国語の音声・音韻を明確に教えてくれるものは意外と少ない。中古期の音韻研究について言えば、これまでは『切韻』系韻書の反切や『韻鏡』に代表される韻図の構造を分析するという方法が主として用いられ、時に外国文字による音写資料がその補助的な材料として使用されてきた。

論者は敦煌文献の中に大量に含まれるチベット文字、コータン・ブラーフミー文字など表音文字によって音写された中国語資料の精密な分析を行うとともに、敦煌文献中の音注資料などを援用して、敦煌を中心とする地域に行われた中国語の歴史の変遷を辿りつつ、資料間の層別を基礎として、九・十世紀「河西方言」の音韻体系を復元した。また同じくチベット語・コータン語で書かれた中国語との会話文例集を用い、それを白話資料と比較することで、当時の西域で用いられた口語の語法的一端を解明している。

本論文（和文465頁）は、第一章：序説、第二章：資料、第三章：音韻、第四章：語法の全四章から構成され、別に参考論文三篇（和文68頁、同58頁、英文22頁）も提出されている。本論文の内容の特色は以下の三点に要約することができる。

（1）チベット文字で表記された中国語資料については、これまで羅常培の研究が存在したが、扱った資料の点数が多くなかったために、資料間の性質の相異を十分に把握することができなかった。論者はラサの唐蕃会盟碑を比較・参照材料としながら、計14種類の敦煌資料を中国語音韻史の観点から分析し、それらが二つの言語層を反映するものであることを明らかにした。今これらの資料をそれぞれ第一種、第二種と呼ぶとすると、第一種は声母の面で摩擦音声母の無声化が観察されるものの、破裂音・破擦音では無声化が十分に進行していないのに対して、第二種ではすべての全濁音声母にわたって無声化が見られる。また第一種資料では不透明な微母の脱鼻音化が、第二種資料では広く見られることが挙げられる。韻母においては、三等韻重紐 A・B 二類の区別が第一種では保持されているものの、第二種資料では A 類に合流するかたちでこの区別が消滅し、その結果、拗介音が -i- の一種類になった。さらに宕摂・梗摂における鼻音韻尾の脱落が第一種資料では原則として見られないのに対し、第二種資料ではこれが統一的に生じている。コータン文字資料や敦煌文献中に観察される音韻特徴は、チベット文字音写資料のうち第二種に一致することを指摘する。

この資料の層別に関する見解は、河西地域の言語史を再構成する上で、非常に重要な発見であり、大枠としては正しい見方といえる。しかし一部の資料についてはなお十分な層位の帰属を確定しがたく、今後の検証を必要としている。

（2）敦煌を中心とする河西地域では広い意味での中国語西北方言を基礎とした言語が日常的に使用されていたが、唐代には首都長安の言語規範が強い強制力を伴って持ち込まれ、行政、教育、宗教などあらゆる局面でこの規範がはたっていた。しかし吐蕃支配期を経ることでその規範意識はしだいに希薄となり、さらに実質的な独立国家であった帰義軍政権下では、土着の語音が長安の語音に取って代わり、標準としての地位を獲得するに至った。上に見た二種の資料の相異はこうした言語の歴史的背景を反映するものであって、第一種の資料が土着の方言に多少とも影響されつつも、本質的には唐代の標準音の反映であり、いっぽう第二種の資料こそ帰義軍期に権威を獲得した土着の方言であったと論者は主張し、この言語を河西方言と呼んでいる。また論者は、この古代の河西方言は今日の同地域の方言とは継承関係がなく、歴史の中に埋没してしまった存在であるとし、これまでの研究が「西北方言」という枠組みで、ある種の共通性を見いだそうとした方法を批判している。この批判は同地域に共存したウイグルの残した資料からも納得のいくものである。

精密な資料分析に基づくこのような河西地域の言語史のダイナミズムの解明は、斬新であるとともに説得力のある、注目すべき成果といえる。敦煌中国語文献の言語史的研究に与える影響は大きい。

（3）論者はまたチベット文字やコータン文字により音写された、これらの言語と漢字漢文との対訳による会話文例集を用いて、計128条からなる河西方言の短文サンプルを抽出することに成功した。またそれらを詳しく検討し、いわゆる白話資料と比較することで、中国語代名詞の発展など幾つかの語法上の問題に新たな知見を提出した。これは中国語の語法史研究

にユニークな材料を提供するもので、興味深い試みとして評価できる。ただ資料的制約のため断片的な事実の提示に止まっているのは残念である。

以上3点に要約した主論文はすでに書物として刊行され、国内外で一定の評価を得ているし、しばしば引用もされている。また主論文で取り挙げられなかった資料についても、参考論文として提出された研究が行われ、主論文の論旨を補完強化している。すでに百年を越える敦煌文献研究の中であって、中国語に関する研究も決して少なくはない。しかし緻密な資料分析に基づきつつ、歴史的パースペクティブをもって九・十世紀の河西方言の全体像を再構築する論者の研究は、敦煌学及び中国語史の研究に新しい地平を開くものとして高く評価できる。

ただ本論文にも欠陥がないわけではない。とくに音韻再構の手續きには、しばしば透明性を欠くところがみられる。これには論者がデータ分析に際して周辺事情を重視しすぎた点、また上に述べた第一種と第二種の異なった層の言語音の整理が不十分である点が深く関与している。しかし、これらの欠陥も改善できる見込みがあり、本論の価値を大きく損なうものではない。

以上、審査したところにより、本論文は博士（文学）の学位論文として価値あるものと認められる。なお、2005年11月2日、調査委員3名が論文内容とそれに関連した事柄について試問した結果、合格と認めた。